**百体神社**

百体神社は、大和朝廷に征服された九州南部の民族である隼人の魂をなだめるため、8 世紀に創建された小さな神社です。ここは宇佐神宮の末社で、勅使街道という道の途中、化粧井戸や凶首塚古墳の東にあります。

古代の記録によれば、隼人は大和朝廷による支配と南九州への拡大に抵抗し、8 世紀初頭に反乱を起こしました。720 年に大和の軍勢が隼人の地域に向けて出発したとき、八幡神は守護神として、持ち運べる社（神輿）に乗って同行しました。戦いは激しいものでしたが、隼人はしばらくの間、うまく地域を守ることができました。

最終的に大和軍は、傀儡子という人形による公演で隼人の気をそらす作戦を実行しました。これに魅了された隼人軍は警戒を緩め、ついに敗北し、その後、残りの隼人は征服されました。大和軍は勝利の証として 100 人分の頭部を宇佐に持って帰り、後にこの地域に埋葬したと言われています。

反乱の後の数年間、疫病と飢饉がこの地域を襲い、人々は隼人の怨霊が原因だと信じました。その時、八幡神からの神託が下り、八幡神は反乱の際に犯された殺生に遺憾の意を表し、毎年、放生会（生き物を解き放つ儀式）を行うべきだと宣言されました。それだけでは宇佐の不幸に終止符が打たれなかった時、亡くなった隼人を祀り、その魂を宥めるために百体神社が設立されました。

千年以上が経過しましたが、放生会の儀式と隼人のための祈りは、宇佐神宮の秋の仲秋祭に欠かせない儀式として今でも行われています。祭りの最終日には、八幡神の御霊を運ぶお神輿が百体神社へ運ばれ、百体神社に祀られている隼人の魂を鎮める儀式が行われてから、八幡神は宇佐神宮へ戻されます。かつては、この儀式の一環として、隼人の乱の際に演じられたと考えられている傀儡子の舞や、神様同士の相撲を表現した「神相撲」という人形による相撲が百体神社で行われていました。その伝統は宇佐では 20 世紀に絶えてしまいましたが、九州にある他の 2 つの神社（吉富の八幡古表神社や中津の古要神社）で続いています。これらの神社で祀られている神々の霊を宿す神聖な器は、隼人の気をそらすために使われた傀儡子人形であると言われています。